

理念の追求・普及・実践を目指して

「繁栄によって平和と幸福を」—— PHP 研究所を創設

第二次世界大戦終結直後の日本は、敗戦で文字通り危機に瀕していた。道徳の乱れ、人心の荒廃は目に余るものがあり、戦争は終わったものの、平和とはほど遠い状態であった。また、法律や制度の中には社会の実情に合わないものも多く、まじめに働くほど損をするといった矛盾が少なからず見られた。

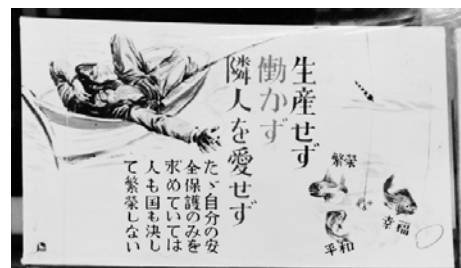
そうした世相の中で創業者は、「これが人間本来の姿なのか」という強い疑問を抱き、人間そのものについて、また人間社会の意義について、さまざまに思いを巡らせた。そして、「この世に物心一如の繁栄をもたらすことによって、真の平和と幸福を実現する道を探求しよう」と決心した。

そこで「繁栄によって平和と幸福を」(Peace and Happiness through Prosperity) を実現するための研究および運動の機関として、1946年(昭和21)11月、「PHP 研究所」を創設、広く社会の人々に呼びかけ、積極的な活動を始めた。

この PHP 活動の趣旨について創業者は、翌年1月の経営方針発表会で、次のように説明し、社員に理解と協力を要望した。

「人類の平和と幸福のためには、豊かに富める社会をもたらさなければならない。現在のこの貧困なる社会を、一日も早く改善しなければならない。しかし、現在行われていることは、すべて逆である。これは、現在の社会に繁栄をもたらす政治がないからだと言える。そして、これは、真に繁栄をもたらす経営理念が認識されていないということに他ならない。現在の日本の状態では、国家社会の安定をはかることが先決問題である。これを考えずして、会社の安定をはかることはできない。私は、この考えのもとに、PHP 運動を起こしたのである。(中略)

この考えは、すでに昭和7年の5月5日に、はっきりと抱いていたのである。私は、繁栄によって250年先には物資に充ち満ちた世の中をつくり出そう、それが我々の使命である、と宣明している。当時のあの方針が今ここに形となって現れたのである。どうか諸君には、わが社に生まれたこの PHP 運動を、心から熱誠をもって支援願いたい」



1946年(昭和21)
PHP普及運動の際に掲示されたポスター

思いを訴えるため、2カ月で34カ所に出向く

当時の社会情勢に即応して、PHP 研究所は、次の十項目を第一次研究目標として、社内はもちろん、広く社会の各方面へ呼びかけを始めた。

- 第一、 働くものに豊かな生活を
- 第二、 自由で明るい働きを
- 第三、 民主の正しい理解を
- 第四、 労使おのおのその営みを
- 第五、 まず無駄を省こう
- 第六、 国費は少なく、効果を多く
- 第七、 租税は妥当公正に
- 第八、 企業の細分化によって画期的繁栄を
- 第九、 働くものを生かして使え
- 第十、 教育は全人格を

創業者は、「**ともかく自分の思いを多くの人に聞いてもらいたい**」と、企業、労働組合、役所、警察、裁判所、それに婦人団体、青年団体、大学の教授会等に出向き、自らの思いを訴えた。東西の本願寺で、僧侶と諸行無常について話をしたりもした。訪問先は、1946年（昭和21）11月3日の創設からその年の年末までで34カ所にのぼった。街頭に立って、『PHP運動に参加せよ』というビラも配った。

こうしてさまざまな場で直接思いを訴える一方、1947年4月には、PHP研究所の考え方を発表し、また各界の衆知を集める場として、機関誌ともいうべき、月刊誌『PHP』を創刊。1948年2月からは毎月、約2年半にわたって、大阪・中之島の府立図書館において、公開の「PHP定例研究講座」を開催するなど、精力的に活動を展開した。



1948年（昭和23）
毎月行なわれたPHP定例研究講座にて

1950年、当社の経営再建に専念することになった創業者は、PHP活動を『PHP』の発刊だけにとどめ、やむなく中断、11年後の1961年、社長を退任して会長に就任したのを機に、京都の真々庵において再開した。

当社が世界的な企業に成長していくにつれて、PHPの概念は当社の経営とともに、『タイム』『ライフ』をはじめ世界的な新聞、雑誌などでも紹介され、多くの人々の支持を得るようになっていった。

人間研究の集大成『人間を考える—新しい人間観の提唱』を出版

創業者は、PHP研究所を創設して以来、その活動を進める過程で、この世に真の繁栄・平和・幸福を実現していくには、お互い人間の本質を正しく究め、それに則してものごとを考えていくことが大切であると思に至った。

これまで人類が、常に繁栄・平和・幸福を求めながら、幾たびとなく争いを繰り返し、あるいは苦悩にあえぎ、貧困に陥りつつ今日に至っているのは、結局お互いが人間の本質を的確に把握していないからではないかと考えたのである。

そこで、創業者は、PHP 研究の基本の課題の一つとして、人間とはどういうものかの解明、つまり新しい人間観の確立を掲げ、20 年以上にわたって衆知を集めつつ検討、研究を重ねた。そして 1972 年（昭和 47）8 月、そうした衆知の所産ともいえるべき成果を『人間を考える—新しい人間観の提唱』として発刊した。

同書は、創業者のそれまでの PHP 研究と人間に関する思索の集大成であり、原稿が完成した時、「**自分が言いたかったことはこれや。もう死んでもいい**」とまで語ったといわれている。

宇宙における生成発展の理法に始まり、人間を万物の王者として位置づけ、その使命と責任を自覚すべきことを訴えたこの書は、1970 年（昭和 45）の大阪万博を境に、急速な転換を迫られ、混迷の度を増す日本社会にあって、読者に感銘を与えた。

創業者は、1973 年 1 月の経営方針発表会で、同書について次のように話している。

「この本の一つの狙いは、衆知を生かすことです。われわれが王者として、真に志を遂げることのできる成果ある人生というものをつくろうとするならば、それは自分自身の知恵だけではいかんだ。衆知によってものごとを判断し、そして過ちなくやっていくというところに、王者としての人間に真の価値が生まれてくるのだ、という意味のことを書いてあるのです。



1973 年（昭和 48）
経営方針発表会で「人間を官上げる—
新しい人間観の提供」の本を手に話をする

従って、この本は、会社の経営に生かすことができる。その意味で、これは一面会社経営の書である、事業部経営、研究所経営の書であると、こういうように解釈を広げていただいてよろしいと思うのであります」

この年、社内の各部署で、この本の読書懇談会が活発に行われた。

なお、同書は、1975 年（昭和 50）2 月、「真の人間道を求めて」を収録し、『人間を考える 第一巻』として再刊された。

1000 万部普及したい——『道をひらく』への思いを語る

1968 年（昭和 43）5 月の発刊以来、いまなお読み継がれるロングセラー『道をひらく』。2013 年 12 月に累計 500 万部を突破した。戦後のベストセラー（単行本と新書のみ）では、黒柳徹子著『窓際のトットちゃん』、J・K・ローリング著『ハリー・ポッターと賢者の石』に次ぐ歴代 3 位。PHP 研究所の機関誌『PHP』に連載した短文の中から 121 篇を選んでまとめたもので、この中には、「身も心も豊かな繁栄の社会を実現したい」という創業者の願いが込められている。

創業者は、1968 年 6 月、PHP 研究所の社員に対し、同書への思いを次のように語っ

ている。

「この『PHP 道をひらく』はいわば一つの教典と申しますか、PHP の教典として一役を果たすもんだと思いますので、これは永遠に普及していきたいと、こういうように考えております。そして夢のようなことを言うようではありますが、これは1,000万出していきたいと、こう実は考えております。(中略)

4、5日前でありましたが、私はうれしい話を聞きました。ホームランを打った野球選手が、記者からのインタビューの中で、“最近、『PHP 道をひらく』という本を読んだら、素直な心にならねばならないということが書かれてあった。それを読んで非常に感ずるところがあって、そういう素直な心で物事を考え、行わなならんということを念じてバットを振った。するとそれが4点を獲得したということになった。大変うれしく思っている”という意味の話であった。

その選手がいつ、どこでこの本を求めたかは知りませんが、その成果をインタビューで発表してくれたということ、これは非常に『PHP 道をひらく』の効果というものであると思います。

こういうことが、随所に現れてくるのやないかと思う。この本は誰がつくったものでもない。結局多くの人々の衆知、古今の衆知が積み重ねられて、ああいう言葉がつくられたんです。僕自身もあれを枕元に置いて、晩に何かあった時に見るようにしています。そうすると、なるほどそうやなあ、これは改めないかなあということを、非常に感激をもって読むことができる。それを実行できない場合もありますが、努めてそうしたいと考えることが、最近多くなってまいりました。



PHP 研究所の資料室にて

僕自身もそうでありますから、他の人も僕と同じように考えて、あの本に目を通してもらうと。そして感ずるものがあれば、口づてに勧めてもらうと。そして多くの人にそれが伝わっていけば、1,000万部も達成できるだろうと思います。その時には、さらにわれわれは一步進めて、世界の人々にこの本を送りたいと考えています。

そうすれば、PHP の基本理念、繁栄・平和・幸福というものが、いろいろな人の考えの活動によって達成されていき、世界にそれがもたらされるんやないかという感じがするんであります」